安芸郡芸濃町

赤坂遺跡発掘調査報告書

1991・3

三重県埋蔵文化財センター

序

私たちのまわりには、昔の人々の生活の跡をとどめる様々な遺跡が、自然環境の一部となって多数残っていますが、各種の開発事業に伴い改変されたり、消滅させられようとしている遺跡も数多くあります。

各種の開発事業は、私たちの現在の生活をより向上させていくということで必要な面をもっていますから、このような状況にある遺跡の取扱には、関係方面と事前に十分協議し、御理解と御協力を得て、適切な保護・保存を進めていくことも大切であると考えています。

この赤坂遺跡も関係機関と十分協議した結果、現状保存が困難なため、事業実地前に記録保存を図る目的で発掘調査を実施しました。ここに、その成果を報告します。

調査にあたりまして、県農林水産部、津農林水産事務所、津市教育委員会、芸濃町教育委員会をはじめ、地元の方々に多大の御協力をいただきましたこと、深く感謝いたします。

平成３年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　　中　林　昭　一

例　　言

1　本報告書は、広域営農団地農道整備事業中勢Ⅰ期地区（グリーンロード）に伴い緊急発掘調査を実施した安芸郡芸濃町大字岡本に所在する赤坂遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

2　調査は、次の体制で行った。

調査主体	三重県教育委員会		
調査担当	三重県埋蔵文化センター	調査第１課主事	堀田隆長
調査協力	津市教育委員会	学芸員	米山浩之
	芸濃町教育委員会	社会教育係長	藤谷弘一

3　報告書作成は、三重県埋蔵文化財センター調査第１課及び管理指導課が担当した。

4　挿図の方位は、磁北を用いた。

5　遺構表示略記号は、下記による。

ＳＡ：柵列、ＳＢ：掘立柱建物・竪穴住居、ＳＤ：溝、ＳＫ：土坑、ＳＺ：その他

6. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　言……1
　1　調査に至る経過……1
　2　位置と環境……1
Ⅱ　遺　構……3
Ⅲ　遺　物……3
Ⅳ　ま と め……8

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　遺跡地形図……2
第３図　調査区及び遺構実測図……4
第４図　ＳＢ１～ＳＢ５遺構実測図……5
第５図　遺物実測図……6

図　版　目　次

ＰＬ１　調査前全景、調査区全景
ＰＬ２　調査風景、ＳＢ１全景
ＰＬ３　ＳＢ１貯蔵穴、ＳＢ２全景
ＰＬ４　ＳＢ２遺物出土状況、ＳＢ２カマド跡
ＰＬ５　ＳＢ３全景、ＳＫ７全景
ＰＬ６　ＳＢ４、ＳＢ２の西方ピット群
ＰＬ７　出土遺物１
ＰＬ８　出土遺物２

Ⅰ 前 言

1 調査に至る経過

昭和63年度に事業計画予定地内の分布調査を実地したところ、古墳時代以降の集落跡と見られる赤坂遺跡3,000㎡と中世の城館跡の荻野城跡の一部の2か所が確認されたため、県農林水産部耕地課へ通知し、その取扱いについて協議した。

平成元年9月下旬、分布調査で確認された赤坂遺跡について、20m毎に試掘坑を設定して試掘調査を実施した。その結果、計画路線の丘陵に近い部分の一段高い田畑で遺物包含層や奈良時代の土器片及び小穴等が検出され、路線幅10m×路線長110mの約1,100㎡について本調査が必要であることが確認された。

これをもとに、耕地課及び津農林水産事務所と協議するとともに、発掘調査の体制づくりに関して芸濃町教育委員会及び津市教育委員会にも文化振興課を通じて協力依頼した。

調査にあたって、津市教育委員会と県教育委員会との間で、「埋蔵文化財発掘調査にかかる職員の応援に関する協約書」を締結して津市教育委員会の協力を得るほか、芸濃町教育委員会も現場雑務の処理に協力を得ることとなった。

発掘調査は、県農林水産部から調査経費全額の執行委任を受けて、平成2年7月23日から8月31日にかけて実施した。

なお、荻野城跡の一部分が路線地内にかかっていたため、平成2年12月中旬に試掘調査を実施したところ、遺構・遺物はなく自然地形と判明した。

2 位置と環境

赤坂遺跡は、安濃川中流左岸の標高40m程の河岸段丘上に位置していて、その範囲は東西約150m、南北約225mで、行政的には三重県安芸郡芸濃町大字岡本字赤坂・浅田地内にある。

「芸濃町史」により概観すると、安濃川流域では現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されていない。

縄文時代では良好な遺跡が殆どなく、中ノ川流域に小規模な遺跡2～3か所が知られている程度である。

弥生時代では、興遺跡（1）、椀田遺跡（2）、多門遺跡（3）、柏井戸遺跡（4）、馬屋町遺跡（5）がある。いずれも河岸段丘上に立地しているが、低位段丘面にも遺跡がみられるようになる。

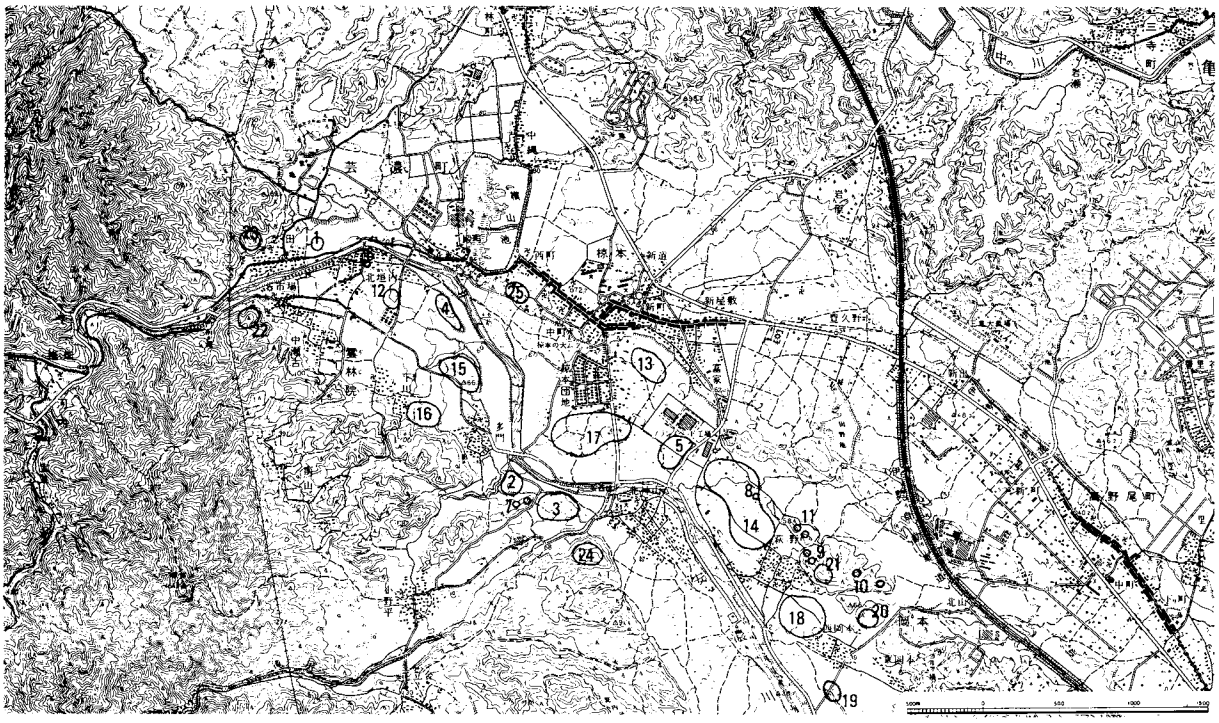
古墳時代になると、竹ノ内古墳（6）、鳩ノ上古墳群（7）、松山古墳（8）、宮谷古墳群（9）、東山古墳群（10）、大屋垣内古墳群（11）等が確認されているが、いずれも古墳時代後期の円墳である。安濃川中・下流域の古墳の群集状況と比べて希薄であり、この時代の集落跡もみるべきものがない。

奈良、平安時代以降になると野垣内遺跡（12）、巾遺跡（13）、松山遺跡（14）、北奥遺跡（15）、下川遺跡（16）、椋本南方遺跡（17）、赤坂遺跡（18）、浅田遺跡（19）など大規模な遺跡がみられるようになる。

条里制遺構としては、本遺跡の周辺の荻野・岡本地内に比較的明確な条里地割りが残るほか、雲林院付近にもわずかに条里地割りが残る。また、忍田には、「八の坪」という小字名が残っている。

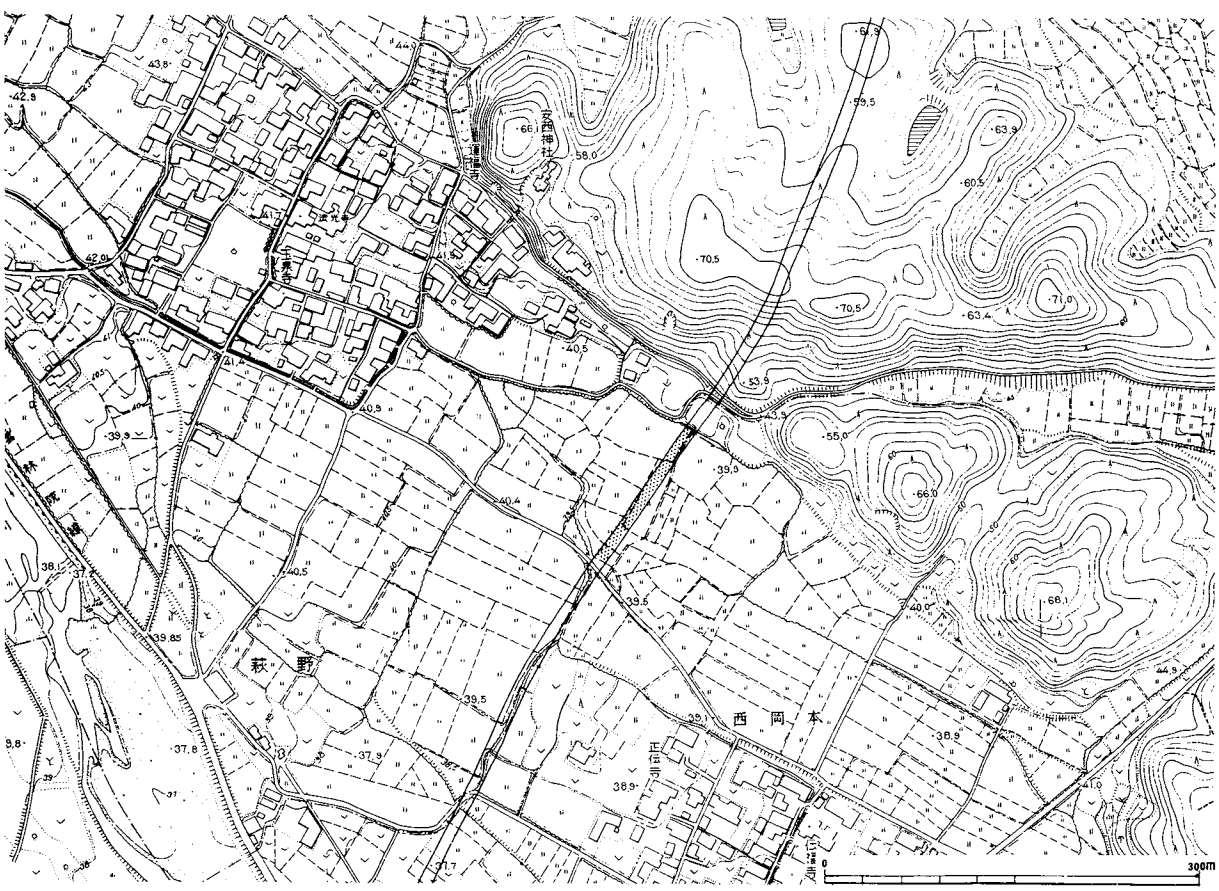
中世に入ると、岡本城跡（20）、荻野城跡（21）、雲林院城跡（22）、忍田城跡（23）、前山城跡（24）、野呂館跡（25）など数多くの城館跡が地形を利用して築かれているが、これらの城館主も戦国時代末期の織田信長の伊勢侵攻とその余波の中で次第に滅亡し、近世的再編の後、近在の拠点集落へと発展し現在にいたっている。

（参考文献）
「芸濃町史　上巻」　（芸濃町教育委員会　1986）
「野呂氏館跡発掘調査報告」
（芸濃町教育委員会　1984）



第１図　遺跡位置図（１：50,000）　（国土地理院　　椋本　１：25,000）

1	興　遺跡	2	椀田　遺跡	3	多門　遺跡	4	柏井戸　遺跡	5	馬屋町　遺跡
6	竹ノ内古墳	7	鳩ノ上古墳群	8	松山　古墳	9	宮谷　古墳群	10	東山　古墳群
11	大屋垣内古墳群	12	野垣内遺跡	13	巾　遺跡	14	松山　遺跡	15	北奥　遺跡
16	下川　遺跡	17	椋本南方遺跡	18	赤坂　遺跡	19	浅田　遺跡	20	岡本　城跡
21	荻野　城跡	22	雲林院城跡	23	忍田　城跡	24	前山　城跡	25	野呂氏館跡



第２図　遺跡地形図（１：6,000）　（芸濃町　１：3,000）

Ⅱ 遺　構

本遺跡の基本的な層序は、第１層　暗灰色土（耕作地）、第２層　暗黄褐色土（床上）、第３層　暗褐色砂質土（遺物包含層）、第４層　褐色砂質土（地山）で、地山までは比較的浅く、耕作土より50～70㎝程で地山となる。調査区全体をみると地山面は南にいくほど深くなり、調査区南半分では、西にやや傾斜している。

主な遺構について概要を述べたい。

竪　穴　住　居

ＳＢ１　調査区中央部よりやや北よりで検出。東西辺2.5ｍ、南北辺2.2ｍ、深さ約15㎝のほぼ隅丸方形を呈している。北辺中央部にカマド跡とみられる焼土が確認された。主柱穴は確認されなかったが、北東隅に径50㎝、深さ30㎝の貯蔵穴が認められ、その中から奈良時代後半から平安時代初頭頃の土師器杯、甕が出土した。

ＳＢ２　調査区中央部よりやや南の調査区東壁ぎわで検出。南東部分が土坑により切られているため、全体規模は不明確であるが、東西辺約３ｍ以上、南北辺2.4ｍ、深さ約20㎝のほぼ隅丸方形を呈している。北辺中央部にカマド跡とみられる焼土が確認され、その中央部から須恵器台付長頸壺の体部が倒立状態で出土した。この竪穴住居の埋土中からは、多数の土器片が出土した。

ＳＢ３　調査区南端より約30ｍ北の調査区西壁ぎわで検出。全体規模は不明確であるが、東西辺約2.5ｍ以上、南北辺3.0ｍ、深さ約30㎝のほぼ隅丸方形を呈している。多数の小穴や土坑などにより床面は攪乱されているが、一部には粘土の貼り床と思われる痕跡が認められた。北辺やや東よりにカマド跡とみられる焼土が確認された。この竪穴住居の埋土中からも多数の土器片が出土した。

掘　立　柱　建　物

ＳＢ４　竪穴住居ＳＢ３の反対の東壁ぎわで検出。桁行４間、梁行１間以上の建物である。柱間は、桁行1.8ｍ、梁行1.8ｍで、柱掘形は、径40㎝前後の円形または長方形である。桁行方向は、Ｎ５３°Ｅである。

ＳＢ５　掘立柱建物ＳＢ４のすぐ南で検出、桁行２間、梁行２間の建物である。柱間は、桁行2.4ｍ、梁行1.9～2.3ｍで、柱掘形は、径30～60㎝前後の円形または長円形である。桁行方向は、Ｎ42°Ｅである。

柵　　列

ＳＡ６　竪穴住居ＳＢ１の北約15ｍ付近で検出。柱列は７間あって柱間は1.2ｍ前後で、柱掘形は、約30～40㎝のほぼ円形である。柱列方向は、Ｎ22°Ｅである。

土　　坑

ＳＫ７　竪穴住居ＳＢ２の南約６ｍ付近で検出。長径3.4ｍ、短径2.0ｍ、深さ50～70㎝の不整形を呈する。この土坑の北壁から押型文土器片が出土した。

そ　の　他

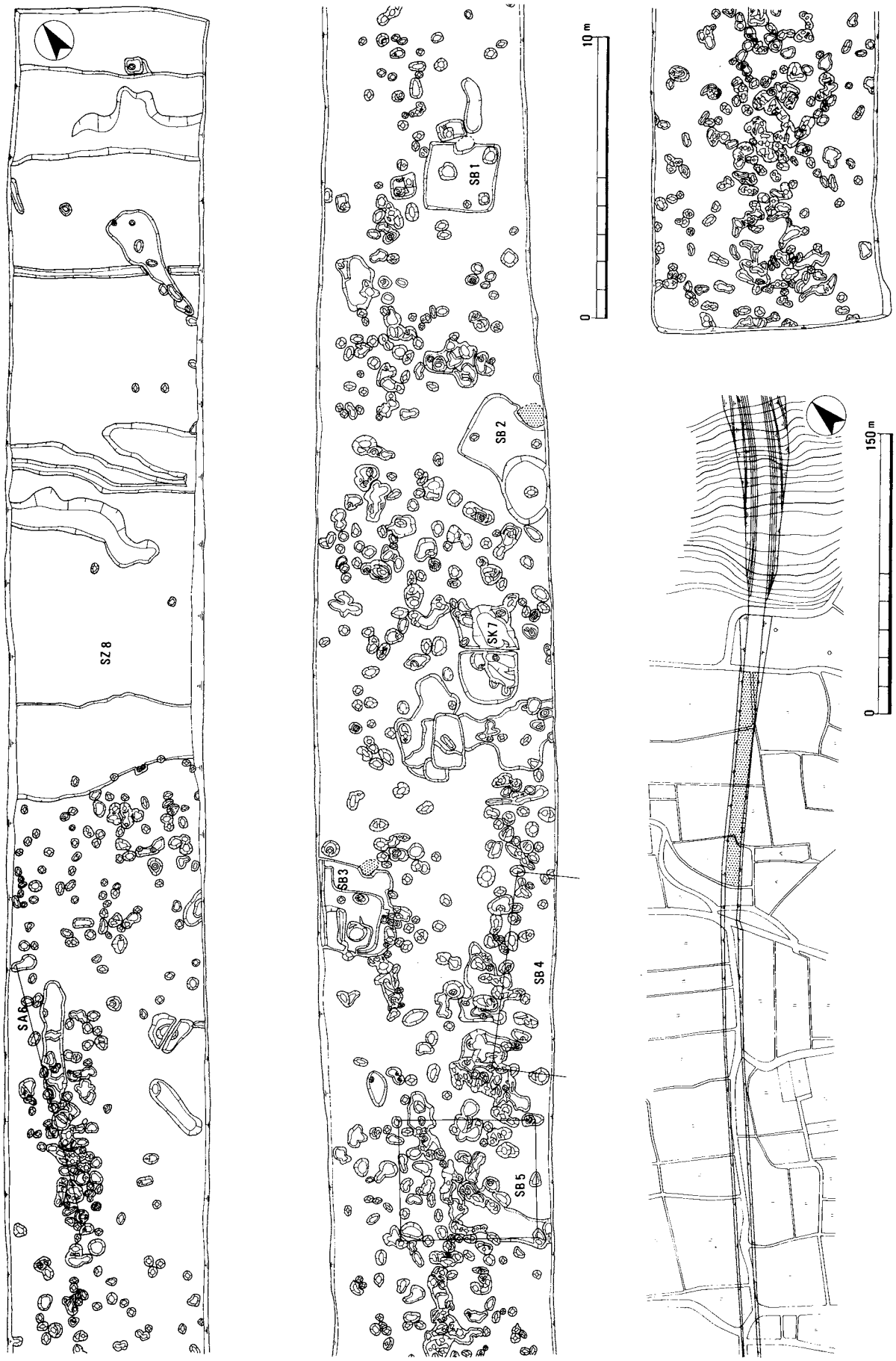
ＳＺ８　調査区の北部で検出。幅12ｍ、最深部1.5ｍの自然流路と思われる。埋土は主に砂質土で、ごく微量の土師器片、須恵器片、山茶椀片が認められた。

Ⅲ 遺　物

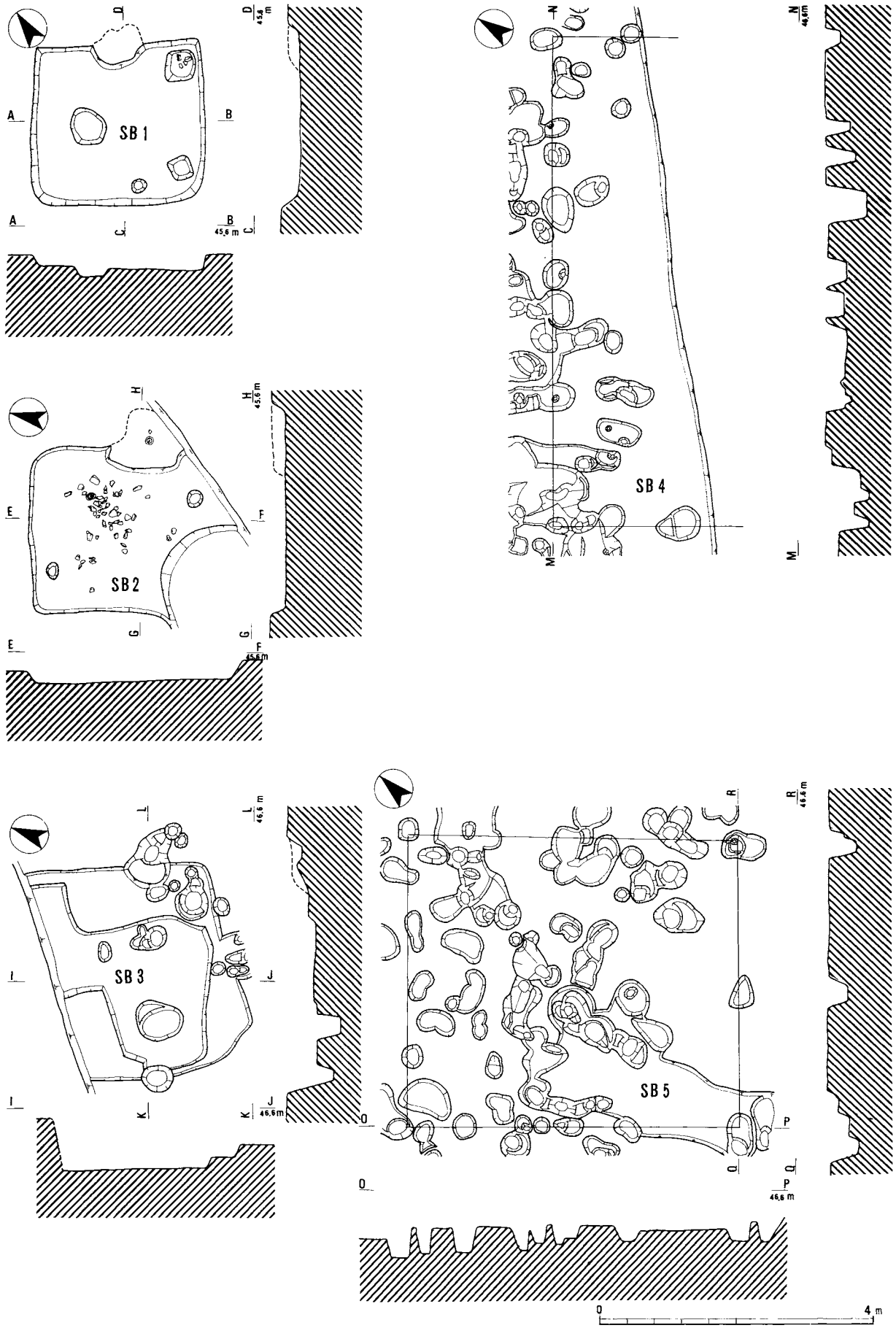
出土した遺物は、コンテナ箱に整理した状態で約10箱であるが、全体的に小片が多い。時期としては、奈良時代後半から平安時代初期頃の土器片が中心であるが、古くは縄文時代早期の土器片から新しいところでは中世の土器片を含んでいる。

主な遺物について概要を述べたい。

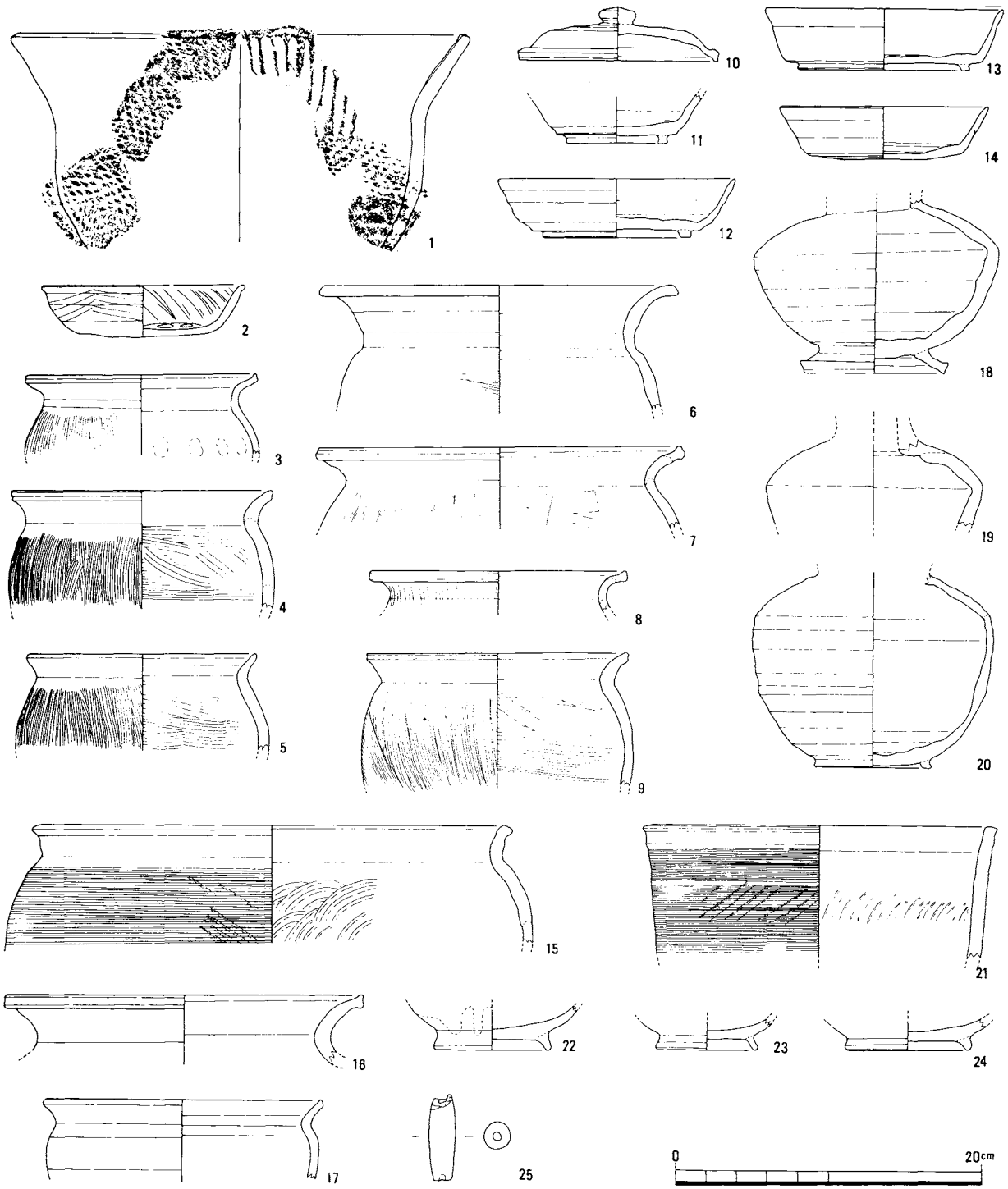
縄文土器（１）　早期の押型文土器で、ＳＫ７から出土。頸部は、ゆるく直線的に開き、体部は、やや丸みをおびて内弯する。外面に長径0.7㎜、短径0.3㎜のポジティブな楕円文を施し、内面には口縁



第3図　調査区（1：3,000）及び遺構実測図（1：200）



第４図　ＳＢ１～ＳＢ５遺構実測図（１：80）



第５図　遺物実測図（１：４）

部から頸部にかけてやや斜め方向に幅0.7～0.8㎜の沈線を施し、その直下に外面と同様のポジティブな楕円文を一定の幅で横位に施している。胎土はやや粗く、焼成は良好で外面は橙黄褐色、内面は黄灰褐色を呈する。ＳＫ７から出土。

土師器杯（２）　口径13.0㎝、器高3.4㎝胎土はやや粗く、焼成は良で、色調は赤褐色を呈する。内面の口縁部から体部にかけて放射状の暗文を、底部にラセン状の暗文を施し、外面の口縁部から体部にかけてヘラミガキを施す。ＳＢ１から出土。

土師器甕（３～９）　３は、口径15㎝、胎土はやや密、焼成は良で、色調は灰褐色を呈し、外面に煤が付着する。口縁部が外反し口縁端部が上方にひきあげられている。外面体部にやや粗いハケメを施す。

ＳＢ１から出土。４・５は、口径15.7～16.9㎝、胎土は密、焼成は良で、色調は暗灰褐色と淡黄灰褐色を呈する。口縁部が外反し口縁端部をやや尖り気味に収める。外面体部にやや細かいハケメを縦方向に、内面体部にやや細かいハケメを横方向に施す。いずれもＳＢ２から出土。６は、口径12.6㎝、胎土は密、焼成は良で、色調は暗黄灰色を呈する。口縁部が強く外反し口縁端部を丸く収める。ＳＢ２から出土。７は、口径23.4㎝、胎土は密、焼成は良で、色調は赤褐色を呈する。８は口径16.5㎝、胎土は密、焼成は良で、灰褐色を呈する。口縁部が外反し口縁端部が上方にひきあげられている。いずれもＳＢ３から出土。９は、口径17.0㎝、胎土は密、焼成は良で、色調は黄褐色を呈する。調整技法は、４・５と同様で遺物包含層から出土。

須恵器杯蓋（10）　口径12.8㎝、器高3.4㎝、胎土は密、焼成は良で、色調は暗灰色を呈する。頂部はロクロヘラケズリのあとに宝珠つまみを付ける。口縁部は大きく屈曲し、端部は垂下する。遺物包含層から出土。

須恵器杯身（11～14）　11は、底部１／４残存のため、口径、器高は不明。胎土は密、焼成は良で、色調は暗灰色を呈する。ＳＢ２から出土。12は、口径15.2㎝、器高3.8㎝、胎土は密、焼成は良で、色調は暗灰色を呈する。底部はヘラギリ未調整で、低い高台を付ける。体部から口縁部にかけてロクロミズヒキ跡がよく残り、やや湾曲気味に上方にひきげ、口縁端部をやや尖り気味に収める。ＳＢ２から出土。13は、口径15.2㎝、器高3.9㎝、胎土は密、半焼成で、色調は明灰色を呈する。調整は、12と同様。遺物包含層から出土。14は、口径12.4㎝、器高3.3㎝、胎土は密、焼成は粗で、色調は灰色を呈する。高台がつかないが、調整等は12と同様。遺物包含層から出土。

須恵器甕（15～17）　15は、口径30.1㎝、胎土は密、焼成は良で、色調は暗灰色を呈する。内面は雑なタタキを施し、外面は粗いカキメを施す。口縁部はやや外方に開き気味にして、口縁端部は肥厚して丸く収める。ＳＢ２から出土。16は、口径23.0㎝、胎土は密、焼成は良で、色調は灰色を呈する。口縁部は強く外反し、口縁端部は上下に肥厚して収める。ＳＢ２から出土。17は、口径18.0㎝、胎土は粗、焼成は良で、色調は明灰色を呈する。口縁端部は上方にやや引き上げて収める。遺物包含層から出土。

須恵器台付長頸壺（18～20）　18は、胎土はやや粗、焼成は良で、色調は暗灰色を呈する。肩部には自然釉がのこり、体部との境は強い稜をもつ。体部はロクロヘラケズリで調整し、底部はヘラギリの後、外方に強く張る断面八の字状の台をつける。器形から７世紀後半に比定できよう。遺物包含層から出土。19は、胎土はやや粗、焼成は良で、色調は暗灰色を呈する。調整等は18と同様である。ＳＢ２のカマド跡のほぼ中央部から倒立状態で出土したことからみて、カマドの支柱石の代用品として使用された可能性が考えられる。20は、胎土はやや密、焼成は良で、色調は明灰色を呈する。ややなで肩に近く、体部の下半分は、ロクロヘラケズリを施し、底部に低い台をはりつけている。ＳＢ２から出土。

須恵器甑（21）　口径23.0㎝、胎土は密、焼成は良で、色調はやや青みがかった灰色を呈する。外面は、タタキの後、カキメで調整し、口縁部は、なかくぼみの凸帯状に仕上げて、口縁端部は平坦に収める。遺物包含層から出土。

灰釉陶器（22）　胎土は緻密、焼成は良で、色調は、明灰白色を呈する。底部に糸切り痕が残り、割合高い張りつけ高台をもつ。体部外面に施釉が認められる。遺物包含層から出土。

山茶椀　（23～24）　23は、胎土は密、焼成は良で、色調は明灰白色を呈する。内部全面に薄緑色の自然釉が付く。底部に糸切り痕が残り、割合高い張りつけ高台をもつ。遺物包含層から出土。24は、胎土はやや密、焼成は良で、色調は灰白色を呈する。底部に糸切り痕が残り、張りつけ高台をもつ。遺物包含層から出土。

土錘（25）　胎土は密、焼成は良で、色調は黄灰白色を呈する。ＳＺ８から出土。

Ⅳ まとめ

発掘調査の面積の割合からみて、ピット等が密集状態で検出されたものの掘立柱建物等としてまとまらなかった。また遺物は、遺構の検出状況からみると少量である。

検出された遺構・遺物をまとめてみると、奈良時代後半から平安時代初期頃の竪穴住居跡が3棟、時期不明の掘立柱建物跡2棟と柵列1か所、その他として、土坑、自然流路跡が確認された。遺物としては、縄文時代早期の押型文土器、飛鳥時代後半頃の須恵器、奈良時代後半から平安時代初期頃の土師器や須恵器、平安時代以降の灰釉陶器、山茶椀などが出土したが、奈良時代後半から平安時代初期頃の土師器の皿・杯類の出土が殆どみられなかった。

縄文時代早期の押型文土器は、安濃川中流域では、はじめての検出例である。1例のみの出土であるため、確定的なことは言えないが、下表のようにまとめてみると、当遺跡出土の押型文土器は、黄島式①と高山寺式②の特徴を部分的に共有しており、黄島式と高山寺式の中間に位置すると考えられる。

また、奈良時代から平安時代になると遺跡が大型化する傾向となるが、当遺跡の性格付けなどは、すでに発調査されている松山遺跡や北奥遺跡及び椋本南方遺跡等と比較検討していく必要があり、今後に期待したい。

（伊藤克幸）

（比較表）

	黄　島　式	赤坂遺跡	高山寺式
外　面	上半部に縦方向のポジティブな楕円押型文 下半部に横方向のポジティブな楕円押型文	上半部に斜方向のポジティブな楕円押型文 下半部に横方向のポジティブな楕円押型文	全体にポジティブな楕円押型文
内　面	上端部に縦方向の1.5～3㎝程の平行沈線 その下方に縦方向のポジティブな楕円押型文が4㎝幅にあり以下は無文	上半部に縦方向の5～6㎝程の幅広い平行沈線 その下方に横方向のポジティブな楕円押型文が4㎝幅にあり以下は無文	上半部に縦方向の10㎝前後の幅広い平行沈線 その下方は無文

〔註〕

① 『瀬戸内海黄島貝塚発掘概報』藤岡謙二郎　立命館大学史前学研究会　1948

② 『探訪　縄文の遺跡　西日本編』潮見浩編　有斐閣選書R　1985　の「20　和歌山県高山寺貝塚　中村貞史」

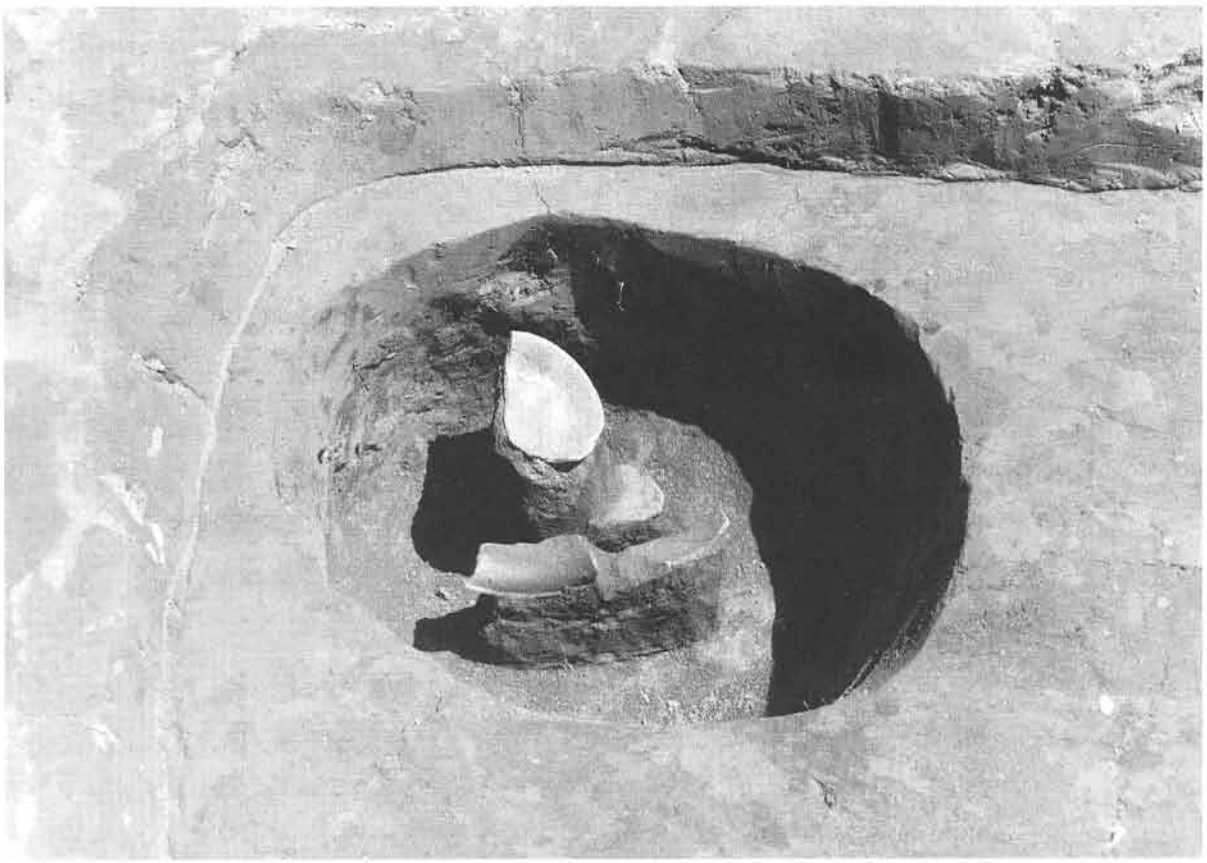
図　　版

調査前全景

調査区全景（南西より）

調査風景（北東より）

ＳＢ１全景（南西より）



ＳＢ１貯蔵穴（南西より）

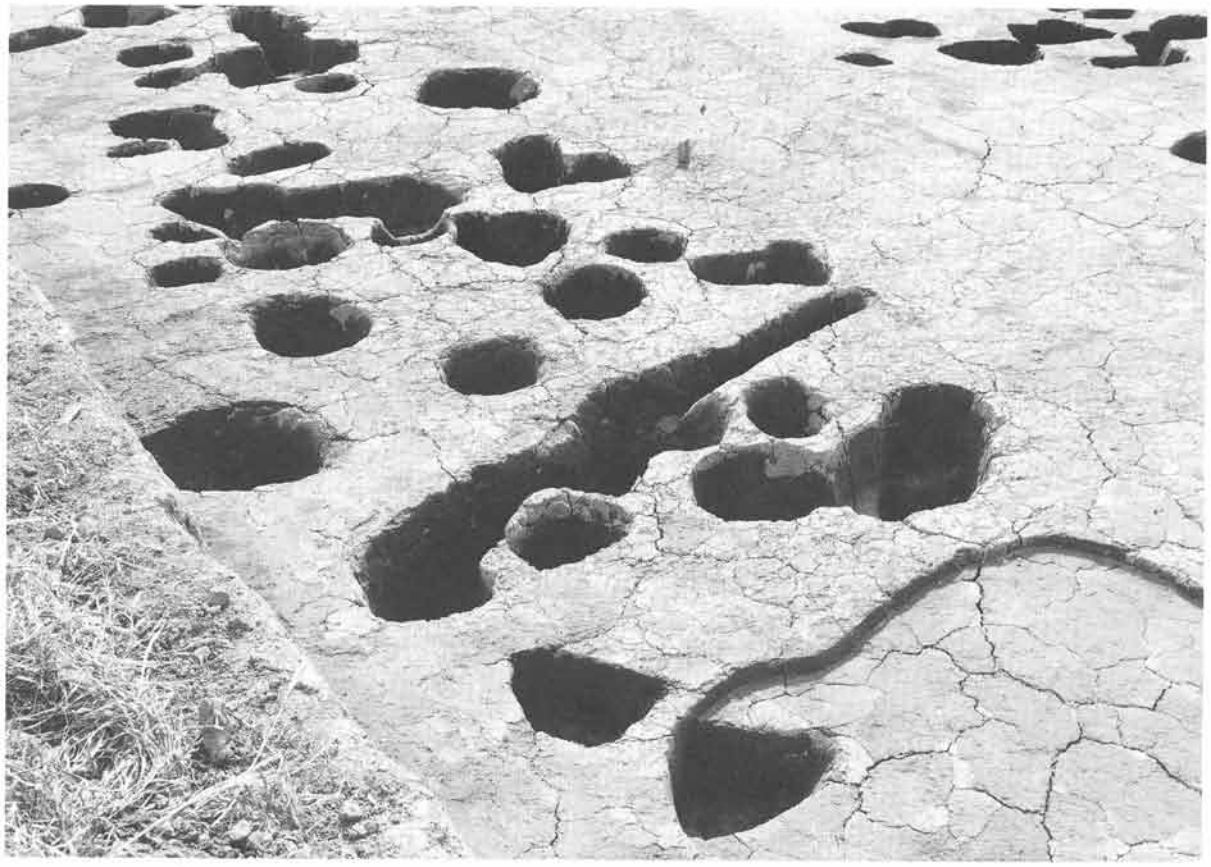
ＳＢ２全景（北より）

ＳＢ２遺物出土状況（北より）

ＳＢ２カマド跡（西より）

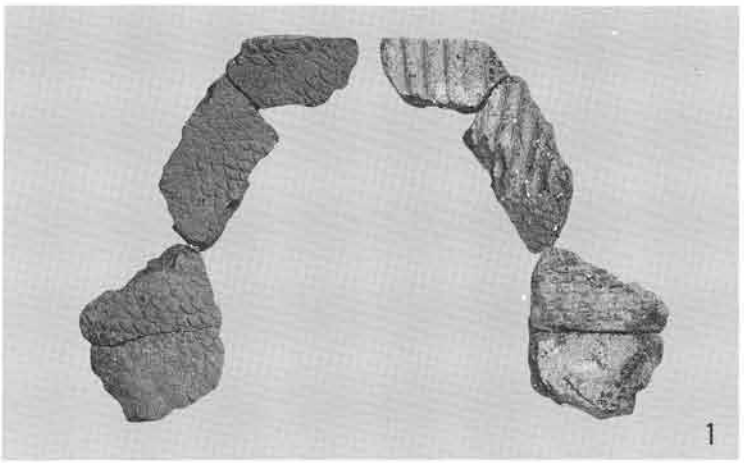
ＳＢ３全景（南東より）

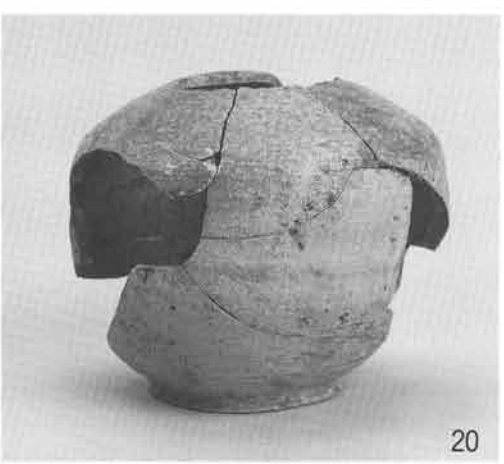
ＳＫ７全景（南西より）



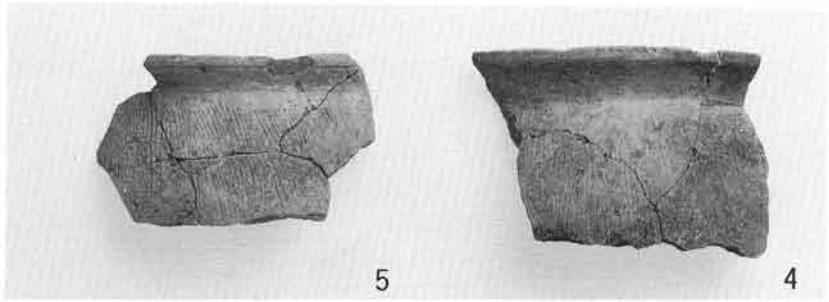
SB4（東より）

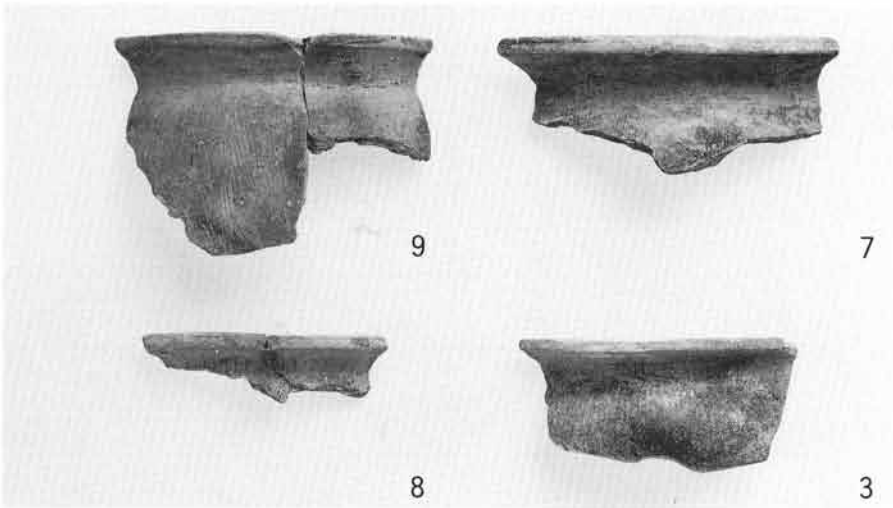
SB2の西方ピット群（東より）

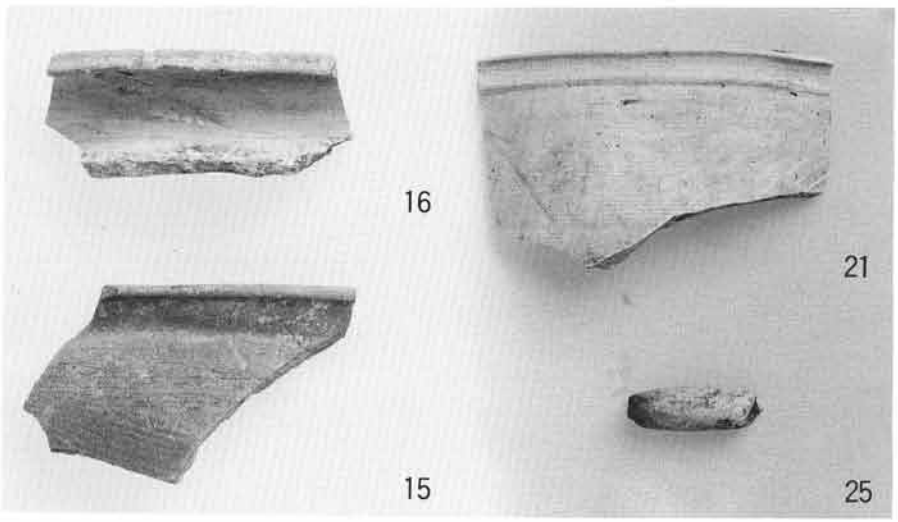


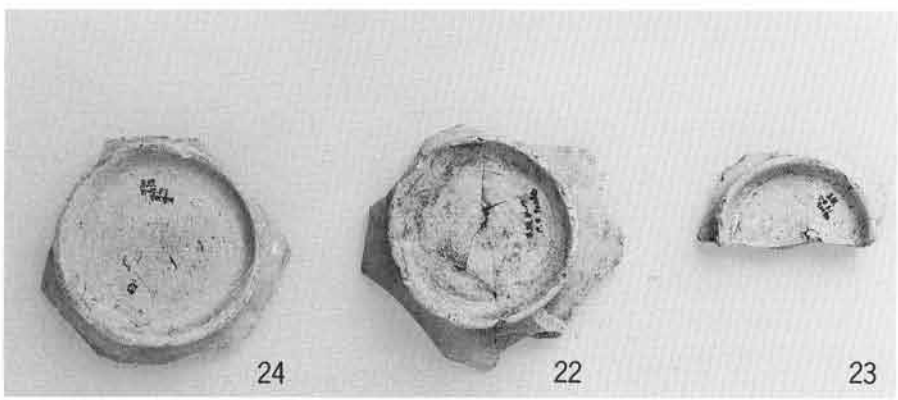


出土遺物1　（1：3）









出土遺物２　（１：３）

平成３(1991)年３月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査書報告書 97

赤坂遺跡発掘調査報告書

1991年３月31日

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　オリエンタル印刷株式会社